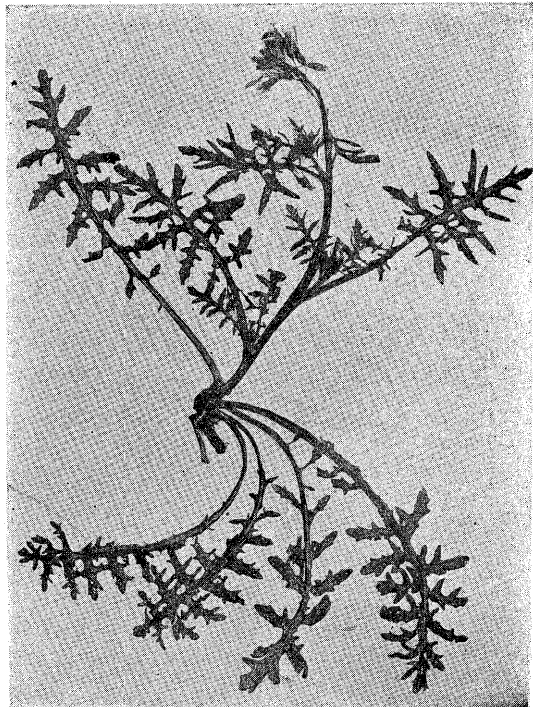


**〇アブラナ科の外來種 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Two Casuals of the Cruciferous Weeds.**

また外來種かと読者もうんざりするだろうが、筆者自身も同様で、よく次から次にと出てくるものとあきれている。そうかといつて見つかつてくるものをそのままにもしておけず、切角しらべ上げても学問上たいして役にもたゝない。それなのに調べあげるのは容易でなく、まことに厄介千万であるが、この迷惑な仕事を伊達健夫から仰せつかつた。材料は同氏が相州茅ヶ崎海浜でとつた (29-4, 1951) アブラナ科の 2 つの草であつて、その 1 は *Lepidium Draba* L. で既にアコウグンバイだのイヌグンバイだのの和名がある位だから以前にも日本人の目にふれたことのあるものと思はれる。この草は葉脚が矢はず状になつているので、この属の他のものに比して見わけ易い。他のものは頗るなん物でかなり時間を空費したが結局 *Brassicella erucastrum* (L.) Schulz in Engler's Bot. Jahrb. で、こまかくいえば var. *montana* (DC) Thell in Hegi, Ill. Fl. von Mitt. Eur. にあたるものとする。

かくきめるにいたつたわけは東大の古い外国標本中にあるピレーネ山地方のものに *Brassica montana* DC. の名が記されてあるからである。しかし Bonnier の Flore Complete Illustrée en couleur de France の図で見ると *Sinapis cheiranthus* Koch にあたるが *B. montana* にはあたらないで *Brassicella erucastrum* になるけれども、この類は多形のものゝようだからむしろ種名でつかんでおくのが安全だと思う。次に和名であるがこんな一時的放浪者にいちいち和名の必要もなからうが、若し必要なら近似の *Eruca* 属にキバナスマシロ属の名があるところから、少し長いキバナスマシロモドキとでもしたらどんなものだ

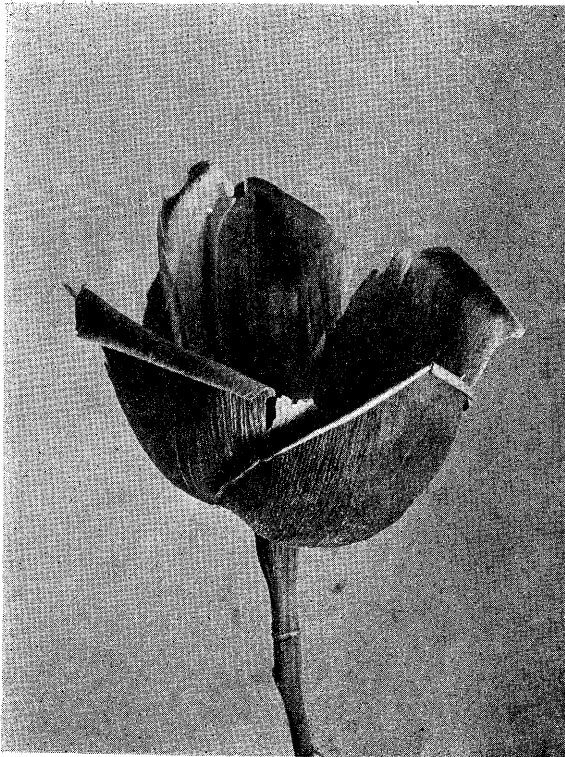


*Brassicella erucastrum* Schulz.  
キバナスマシロモドキ (新称)

ろう。概形はあらためて記す要もあるまいから写真で見ていたゞくことにしたが、くさ丈は伊達氏の材料では 10 cm である。花色は黄色のはずだが標本では白に見えるが、其点は G. Hegi の *Illustrierte Flora von Mittel-Europa* 中部歐洲植物図説 (4 (1): 270) に “getrocknet oft fast weiss” とあるところから判断して褪色したものと思う。学名の変せんは複雑だが Hegi なり *Pflanzenreich* 70 Heft (4: 105-8) に出ているし、また雑録にそんなものは不用だろう。なを日本にきた経路は不明だが原産地は西部欧州である。

### OWood Rose とは何か (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: What is Wood Rose?

ハワイまたはハワイ経由で来る人たちが、ときどき Wood Rose または Wooden Rose なるものをもつてくる。そうして、これがある流儀の生花家に利用されて人の好奇心をそそっている。5 cm ばかりの柄がり、柄のなかほどに托葉の痕らしいものがあり、



Wood-Rose (実物大)

その頂に木化した 5 片の裂片があり、それが相互に縁で重なり合っている。外部は暗色を呈し、いかにも木彫りの装飾品の如く見える (写真参照)。これを原寛博士からハワイ大学の St. John 教授にたゞして貰つたら *Merremia tuberosa* (L.) Rendle の宿存萼を自然乾燥させたものとわかつた。これは萼片だけでそれ以内の器官はすべてとり除いてあるがときには萼が残っていることもある。別に知人が偶然このなかゝら種子を見つけ発芽させたら 6-7 裂の葉が出た。そこで *Botanical Register* (1823) の図とくらべたらまさに一致した。つまり Wood Rose とか Wooden Rose なる名

はこの植物の宿存萼に与え

た名で植物名ではない。最近わかつたことだが、東京の三井の戸越農園に生品がある。